

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 8 月 4 日現在

機関番号：14401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2016

課題番号：15K13252

研究課題名(和文) コミュニティ通訳者を対象とした学術手話通訳者養成プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of Academic Sign Language Interpreter Training Program for Community Interpreters.

研究代表者

中野 聡子 (Nakano, Satoko)

大阪大学・キャンパスライフ支援センター・講師

研究者番号：20359665

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本語の特徴の強い中間型手話の訳出及び表出について2つの調査分析を行い、それらの結果をもとに、コミュニティ手話通訳者らを対象に学術手話通訳の研修講座を開催した。

複合語の訳出表現のわかりにくさは、内容の理解に起因するものの他、日本手話の文法に正確に則って表現されていないものが挙げられ、「空間の移動」「リズム」「うなずき」「手の動きの弱体化・消失の非生起」が関与していた。また中間型手話使用者とネイティブのろう者の表出を比較した結果、CL、アスペクト、ロールシフト(RS)、日本語の複合動詞および補助動詞、形容詞及び副詞の手話表現に違いがみられた。

研究成果の概要(英文)：In the present study, we analyzed the results of two surveys on pidgin sign Japanese translations and expressions with strong Japanese language characteristics, and used the results to organize an academic sign language interpreter training course for community sign language interpreters.

The survey results showed that the difficulty in understanding translated expressions for compound words could be attributed not only to understanding the content, but also the presence of expressions that do not correctly adhere to the grammatical rules of Japanese sign language, and involved “spatial movement,” “rhythm,” “nodding,” and “non-occurrence of hand movement attenuation and loss.” Comparison of the expressions used by pidgin sign Japanese users and native deaf persons showed that there were differences in their respective sign language expressions of classifiers, aspects, role shifts, and Japanese compound verbs, subsidiary verbs, adjectives, and adverbs.

研究分野：特別支援教育

キーワード：教育系心理学 言語学 コミュニティ通訳者 学術手話通訳 養成

1. 研究開始当初の背景

高等教育機関で学ぶ聴覚・言語障害学生の在籍数は全国で2,300名程度(日本学生支援機構, 2013)にのぼる。特に1990年代以降、聴覚特別支援学校からの大学・短大進学率が増加している(坂本, 2011)。このことは、文字よりも手話のほうがアクセスしやすい聴覚障害学生のニーズや、ゼミや実習など即時性のあるやりとりを必要とする授業への参加を手話通訳によって保障する必要があることを意味する。しかし、高等教育機関に手話通訳者養成コースを設置している欧米先進国(小林・白澤, 2013)と異なり、我が国では各都道府県において厚生労働省委託による手話通訳養成事業のもと、ろう者の生活保障のために、いわゆるコミュニティ通訳者として養成された手話通訳者が大半である。首都圏以外の地域では、コミュニティ通訳者が学術手話通訳も担わなければならない状況にあることから、コミュニティ通訳者がすでに身につけている手話および手話通訳スキルを土台として、学術手話通訳に必要なスキルを習得可能にする養成プログラムの開発が必要であると考えている。

学術手話通訳を受けるろう学生や研究者にとって、コミュニティ通訳者による手話通訳はわかりにくく、学術性の高い内容となるにつれて、その傾向はより顕著となる(石野ら, 2011)。その理由として、手話の種類観点から、コミュニティ通訳者は日本語とは異なる独自の言語構造をもつ日本手話が使えないことがよく指摘される。一般的にコミュニティ通訳者の訳出は、日本語を手指コードに変換するという、日本手話とは対極に位置する日本語対応手話により近い中間型手話で行われている。一方、通訳作業過程にあてはめて考えると、(1)日本語と手話に関する言語的知識が十分でないこと、(2)事前準備において学術的内容に関する知識獲得が十分でないことにより、訳出のための分析が十分に行えていないのではないかと考えられる。成人期以降の言語習得の困難さを鑑みると、日本手話での通訳を求めるのは難しいと考えられるが、熟達した通訳者やネイティブのろう者によるろう通訳の訳出との違いの比較から、中間型手話をベースにしつつ通訳作業過程におけるスキルアップを目指せる養成プログラムを開発することが重要なポイントとなるであろう。

2. 研究の目的

本研究では、コミュニティ通訳者の日本語的特徴の強い中間型手話を用いた訳出と通訳作業過程に焦点をあてて、学術手話通訳に必要なスキルを習得可能にする養成プログラムに必要な要素を探索することを目的としている。

3. 研究の方法

(1)研究1: 手話通訳における複合語の訳出

対象者

一般レベルの通訳者3名(S1, S2, S3とする)、指導者レベルの通訳者2名(S4, S5とする)の計5名。

分析対象単語の抽出

学術講義「プルシャスキー語の連体修飾構造」の冒頭13分間について、書き起こし原稿に出現する表現のなかから、手話で名詞+名詞の複合語として表現される単語を抽出し、さらに実際の通訳場面で手話単語として訳出される可能性が高い77語に絞り込んで分析対象語とした。

分析方法

対象手話通訳者の通訳映像から、複合語77語について、形態および意味のわかりやすさの評価を行った。評価者は5名であり、手話通訳士資格をもつ手話通訳者3名、手話通訳支援の研究に従事する者2名(ろう者1名、聴者1名)という内訳になっている。さらに複合語77語の訳出について、以下の点に注目してその構造を記述した。

- 手話表現の逐次訳
- 指文字の表現の場合には、その文字が示す音
- 脱落している要素
- うなずき
- ポーズ
- 手の動きの反復回数(各語彙の構成要素としての反復は除く)
- 空間の位置の移動
- 表現された各要素の(手話の)音節構造
- 弱化、消失などの状況

(2) 聴覚特別支援学校教員とろう通訳者の手話表現の比較

聴覚特別支援学校教員のほとんどはコミュニティ手話通訳者と同じく日本手話獲得の臨界期の問題を抱えるほか、聴覚障害児に書記日本語を習得させるという指導目標があるため、中間型手話を使用することが多い。そこで、教員が国語の授業のなかで用いた手話表出について、ろう通訳者と比較することとした。

対象者

A 聴覚特別支援学校小学部の教員3名(T1, T2, T3)とデフファミリーで日本手話を母語とするろう者1名(I1)。対象者のプロフィールを表1に示す。なおT3は先天性のろう者であるが手話の学習は大学入学後に開始した後期習得者である。I1は大学等で日本手話の指導を行い、またろう通訳者としても活動している。対象者には倫理的配慮及び個人情報の取り扱いに十分な留意をする旨を説明し、同意書の提出をもって了解を得た。

題材

新編あたらしいこくご 1 年下「サラダでげんき」(東京書籍),新編新しい国語 3 年下「サーカスのライオン」(東京書籍),国語 4 年下「アップとルーズで伝える」(光村図書)

方法

T1,T2,T3 の国語の授業 40 分間をデジタルビデオカメラで教室後方から撮影した。撮影対象は教員のみとした。上記題材を取り扱っている部分を抜き出し、教員と児童のやりとりは適宜話の流れがつながるように編集を加えて、台本を作成した。ネイティブサイナーであるろう通訳者に、スクリーン上に提示された台本に従って手話表現をしてもらい、その様子をデジタルビデオカメラで撮影した。3 つの題材の収録時間はいずれも約 16 分程度であった。ネイティブサイナーのろう者 2 名,日本手話の言語学的知識を有する大学教員,手話通訳者など 6 名の合計 8 名が,教員 3 名とろう通訳者 1 名の手話表現について映像を比較し,どのような点で特徴的な相違があるか検討した。

4. 研究成果

(1) 研究 1 : 手話通訳における複合語の訳出

訳出の状態にみられる全体的傾向
通訳者 5 名が訳出した単語の評価のまとめを表 1 に示す。

一般レベル群と指導者レベル群の訳出評価の回数について、²検定を行ったところ、有意差が認められた ($\chi^2(2, 5)=89.713, p<.01$)。残差分析の結果、一般レベル群は「わかりやすい訳出」が有意に少なかった。また訳抜けも多かった。

表 1 各通訳者における訳出の状態

通訳者	わかりやすい訳出	わかりにくい訳出	訳出なし	
一般レベル群	S1	25	35	12
	S2	30	22	22
	S3	9	20	43
指導者レベル群	S4	57	6	14
	S5	62	3	8

(単位は「回」)

複合語の訳出のわかりやすさ/わかりにくさに影響を与える要因

手話表現による表出の構造の記述から、わかりにくいと評価された訳出表現には下記のような特徴が含まれていることがわかった。

- 脱落: 複合語の構成要素の一部が表出されていない。
- 不適切な言い換え: 当該複合語の意味の等価性が担保されていない。
- 表現の不統一: 同一の複合語の訳出表現がそのつど異なる。

- 空間位置の移動: ひとつの複合語の表出において手話空間内で表出位置が移動する。
- リズム: 音声の発話リズムに連動して手の動きが反復される。
- うなずき: 手話の非手指標識 (NMM: Non Manual Markers) としての本来の機能とは異なるうなずきが挿入される。
- 手の動きの弱化・消失の非生起: 複合語の構成要素同士が結合したときに生じるべき手の動きの弱化・消失がみられない。

これらのうち、「脱落」「不適切な言い換え」「表現の不統一」の 3 つは、通訳者自身の内容の理解に直接的な影響を受けて、意味が正確に変換されなかったため、わかりにくくなっていると考えられる。また、「空間位置の移動」「リズム」「うなずき」「手の動きの弱化・消失の非生起」は、訳出された表現が日本手話の文法に正確に則って表現されていないためわかりにくくなっていると考えられる。

(2) 研究 2 : 聴覚特別支援学校教員とろう通訳者の手話表現の比較

CL (Classifier) 表現

教員の CL 表現では、表 2 に示すような特徴がみられた。こうした特徴はろう通訳者の表現にはみられなかった。

表 2 聴覚特別支援学校教員の CL 表現の特徴

SASS	● SASSの規則に一致しないサイズ表現 ● サイズや質感を表すNMが脱落。
実体CL	● 異なる分類を表す実体CLの誤用
操作CL	● 手型の誤用はみられない ● 動きがオーバーで操作CLというよりは身ぶりに近いことがある
表現の 意味的重複	● 1つのCL表現で表せるにもかかわらず辞書形の手話単語を意味的に重複して使用

複合動詞の表現

教員は、「映し出す」「繰り返す」「できあがる」「組み合わせる」など、意味的に適切な 1 つの手話単語で表現することが多かった。これに対し、ろう通訳者は、より文脈に併せて CL 表現を使用することが多かった。

補助動詞の表現

シテクダサイ(依頼)シテクレル(授受)シテアゲル(授受)シテミル(試み)は教員もろう通訳者も補助動詞を表す形態素の手話動詞を共通して用いていた。

一方、シテシマウ(非意図性)の表現では両者に相違があり、教員は「失敗」を意味する手話単語で代用するのに対して、ろう通訳者は、NM 表現、手話副詞、RS 表現で表示していた。

アスペクトの表現

教員は、日本語のアスペクトを発話リズムを阻害しない手話単語に置き換える、同音の手話単語に置き換えるなどの代用がみられた。下記に T3 の例を示す。これに対し、ろう通訳者は手の動きや強弱、及び NM 表現により、日本手話の文法に則ってアスペクトを表示していた。

例 (T3): <動く 居る>
(選手たちが体を)動かしている(シテイル:動作継続)

上記の例では、日本語の形態素「してイル」を表すとき、手話動詞「居る」で代用している。

形容詞及び副詞の表現

教員の手話表現では「大急ぎ」を<とてもすぐ すぐ>とするなど、手話単語のみで表されることが多かったのに対し、ろう通訳者は手の動きの強弱や緩急、NM 表現の表出がみられた。

RS 表現

教員の手話表現では日本語の文章に沿って手話単語を表出することから、RS 表現はみられなかった。これに対し、ろう通訳者の手話表現では特に物語文において、CL を含む RS 表現が多用されていた。図 1 にろう通訳者の RS 表現の例を示す。

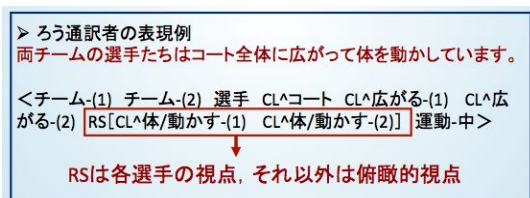


図 1 ろう通訳者の RS 表現の例

(3) 考察

一般レベルの手話通訳者や聴覚特別支援学校教員の手話表出は、日本語の意味や音、リズムに影響を受けやすい。これに対し、ろう通訳者の訳出表現は日本語の意味や語りかけの意図を日本手話で的確に、かつより心情や情景を深く伝えようとするものであったといえよう。日本手話の文法的な側面については、後期手話学習者にとって比較的習得されやすいものとそうでないものがあると考えられる。ろう通訳者に比べて表出に質的な違いはあるものの、CL 表現は手話経験年数に応じて増えていることから、短文の訳出ドリル練習などにより手話表現の幅を広げられる可能性がある。

また、学術性の高い内容においては、「脱落」「不適切な言い換え」「表現の不統一」など、通訳者自身の内容の理解に直接的な影響を受けている部分もあり、これらは熟達した通訳者にはあまりみられなかったことから、事前準備をしっかりとすることでカバーされ

ると考えられる。

(4) パイロット研修の実施

2 つの実験の結果から、一般の手話通訳者にとって、ろう通訳者の訳出表現と比較しながら学ぶことはスキルアップにプラスの効果を与えると予想された。そこで、大学の共通教育の授業を題材とし、ろう通訳者を講師として日本手話翻訳を学ぶパイロット研修を 2016 年 12 月～2017 年 2 月の間に計 4 回実施した。参加者は 1 回 10～30 名程度であった。アンケートでは、非常に好評で、全員がまた実施してほしいという回答であった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1 件)

中野聡子, 菊澤律子, 市田泰弘, 飯泉菜穂子, 岡森裕子, 金澤貴之, 原大介, 手話通訳における複合語の訳出 通訳スキルの違いにおける比較, 日本通訳翻訳学会, 15, 2015, 17 - 34, 査読有

[学会発表](計 5 件)

中野聡子, パワーポイントを使用した講義のわかりやすい通訳方法を学ぶ, 兵庫県手話通訳士協会(招待講演), 2017 年 3 月 26 日, 神戸市新長田勤労市民センター(兵庫県・神戸市)

中野聡子, 大学の授業通訳に日本手話の要素を取り入れる, NPO 法人広島県手話通訳問題研究会(招待講演)2017 年 1 月 28 日, 東区総合福祉センター(広島県・広島市)

中野聡子, 原大介, 金澤貴之, 川口聖, 川鶴和子, 伊藤愛里, 楠敬太, 望月直人, ろう通訳の訳出表現に関する予備的検討 国語の授業における聴覚特別支援学校教員の手話表現との比較, 日本特殊教育学会第 54 回大会, 2016 年 9 月 17 日～2016 年 9 月 19 日, 朱鷺メッセ 新潟コンベンションセンター(新潟県・新潟市)

中野聡子, 原大介, 金澤貴之, 聴覚障害者による学術場面の手話通訳評価, 日本特殊教育学会第 53 回大会, 2015 年 9 月 19 日～2015 年 9 月 21 日, 東北大学川内北キャンパス(宮城県・仙台市)

中野聡子, 学術手話通訳のための事前準備, 国立民族学博物館学術手話通訳研究事業第 2 回ミーティング, 2015 年 7 月 12 日, 国立民族学博物館(大阪府・吹田市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中野 聡子 (NAKANO, Satoko)
大阪大学・キャンパスライフ支援センター・講師
研究者番号：20359665

(2) 研究分担者

原 大介 (HARA, Daisuke)
豊田工業大学・工学部・教授
研究者番号：00329822

金澤 貴之 (KANAZAWA, Takayuki)
群馬大学・教育学部・教授
研究者番号：50323324

(1) 連携研究者

白澤 麻弓 (SHIRASAWA, Mayumi)
筑波技術大学・障害者高等教育研究支援センター・准教授
研究者番号：00389719